

審査論文の要旨

本論文は、古墳時代中期に登場する新式の甲冑である小札式甲冑について、実物資料に対する詳細な検討にもとづいて、その分類と変遷、そして付属具をあわせたセットの復元をおこない、朝鮮半島の資料とも対比しながら、日本列島における展開過程をあとづけたものである。

小札式甲冑は、5世紀中頃に日本列島に導入され、6世紀にはそれまでの帯金式甲冑と入れ替わるように主流になっていく武具である。これまでの研究では、小札式甲冑がばらばらになりやすいという特徴のため、帯金式甲冑と比べて研究が低調であり、実物資料にもとづく全体像の復元という過程が必要とされていた。このように資料的には問題が多いが、武装の発達や軍事制度を考えるうえでは重要な位置を占めており、その研究の進展がまたれている分野である。本論文は、小札甲の変遷を縦軸に、付属具の復元を通じた「構造」の理解を進め、総体としての甲冑を明らかにすることにより、その歴史的意義を探ることが最大の特徴である。

まず、第1章において、これまでの研究史の整理がなされた後、上述のような課題の設定と方法論が提示される。

第2章「古墳時代中期における小札式甲冑の展開過程」では、まず第1節で章の目的を述べたのち、第2節で日本列島に小札甲が定着する過程を、資料にもとづいてあとづけた。具体的には、腰の部分にあたる小札である腰札の形状、一般の小札の形態や緘孔の位置にもとづいて分類をおこなっている。その結果、朝鮮半島からの影響を受けつつ、列島独自に小札甲が変化する過程が示され、小札において次第に規格化が進む現象を明らかにした。そして、第3節では、付属具の検討を通して、それまでの倭の甲冑である帯金式甲冑に適合させる形で小札式の付属具も取り入れられる現象に注目している。この付属具の検討では、従来「籠手」か「臑当」かが不分明であった資料について整理をおこない、その機能を判断する基準を明確にしている。次の第4節では朝鮮半島系甲冑の受容の問題を議論した。朝鮮半島の小札式甲冑が馬冑・馬甲とともに発見される場合がよくあり、それらを「重装騎兵装備」として捉えたいうで、日本列島の小札式甲冑をみると、その受容が限定的であり、戦闘のための重装騎兵が定着しなかったことを述べている。第5節で以上の検討をまとめ、朝鮮半島の影響を受けつつも、小札式甲冑が日本列島独自の変化をとげ、かつ次第に規格の統一を進めていく状況を明らかにした。

第3章「古墳時代後期における甲冑の製作・用途とその性格」では、まず第1節で本章の目的として、小札式甲冑の普及が進む6世紀の課題を示している。まず、第2節では名古屋大須二子山古墳の甲冑の分析から、膝甲の存在を明らかにし、その分布が今城塚古墳をはじめ、継体天皇と関係の深いところにあることを指摘する。このような新式の甲冑の普及に中央の政権の関与が高いとし、6世紀に甲冑の小札の規格化が畿内中枢部を起点に進むことを明らかにした。小札の規格の統一が、倭の武装の統一を示す事実として評価している。なお、この検討の際に、甲冑に付着する木棺の痕跡から、大須二子山古墳が竊穴系の石室内の木棺内に納められていたと推測した。次の第3節では、従来の帯金式甲冑

の伝統が冑に残ることに注目し、帯金式と小札式の技術が交差する状況から、工人の編成過程や分業の問題にも言及した。そして、第4節では、6世紀にいたっても朝鮮半島系の小札甲が日本列島にもたらされていることを取り上げ、その出土地の周辺で渡来人の集落がみられることを、その背景としている。以上のまとめとして、第5節において、小札式甲冑が、規格化を通して列島の主要な武装として定着する一方で、従来技術である帯金式甲冑の技術も温存され、分業する形で生産が展開したと推測した。

終章では、全体のまとめとして、これまでの研究成果を概観するとともに、甲の復元はもとより、付属具の特定作業が重要な位置を占めることを強調している。そして、5、6世紀の甲冑が明らかになることがこの時期の武装や軍事制度の理解につながるだけでなく、飛鳥時代以降の甲冑である大鎧と接続することにより、歴史時代の甲冑の理解が深まるものと展望し、結びとしている。

以上のように、多くの場合、ばらばらになった状態で出土することの多い小札式甲冑について、資料レベルで、甲や付属具の特定をおこない、全体像を明らかにするという地道な作業を基礎とし、その結果として得られる各時期ごとの資料を分類する作業から、小札甲の導入、定着過程をあとづけた。その基礎的作業の緻密さは比類ないと評価でき、それにもとづく考察も手堅いと判断できる。社会や政治的背景などより高次の議論も可能ではあるが、あえて踏み込まず、抑制的に議論をまとめているのも本論文の特徴である。